

特別企画

「物性研究」30周年記念座談会

「物性研究」をどういう雑誌にするのか?

本誌編集長 池田 研介

今年で本誌は創刊30周年をむかえるそうである。このことを本誌編集にたずさわっておられる野坂さんから知らされたのは昨年の3月の編集会議の席上であった。これまで10周年、20周年と節目ごとになんらかの記念特集をやってきたそうで、そういえば、わたし自身もそういうものを読んだ記憶がある。「あーあ、ノサカさん、気がつかなくてもええことに気がついたもんなー。」とは言ったものの、結局編集会議の話題となり、何かやらんとしょうがないという事にあいなってしまった次第。

さてなにかやろうということにはなったものの、私には「今後、物性論の研究がどう展開するか」とか「現在の物性論の問題点とはなにか」といった類の大状況的視点からの特集にはまったく関心がなかった。そういう類いの企画によって本誌そのものが得をするところが何もないからである。

本誌に関して、私の最大の関心は、面白くしようとすればいくらかでも面白くできそうにみえる本誌のような雑誌が、なかなか読者も投稿者も獲得しがたいのはどうしてかという問題であった。こういう、一見小状況的な問題を追及してゆくことによって、逆に物性論の問題点やその今後の展開が見えてくる筈であるというような、切り込み方をとらないかぎり、我々が状況そのものに触れることは決してできないのである。

巷には学会誌を含めて多数の物理の情報誌が飛び交っている。これらの情報誌はある程度、声価の定まった話題にたいする総評を目玉にしている。しかし、このように声価の定まった情報が価値に乏しいことは、いわゆる大新聞の情報が価値に乏しいことと同様である。読者がその価値を能動的に読み取る努力を必要としない情報は、ただ消費されるだけのことである。本誌を通して読者あるいは寄稿者が交換したい情報とはそんなものではないはずである。本誌のような雑誌によってこそ、本当にさわれればヤケドしそうな情報の伝達が可能になる筈である。なのにどうしてその利点が生かされてこなかったのか?

ここに、30周年の記念企画として本誌を読者あるいは寄稿者にとって本当に有用な雑誌にしてゆくためにはどうすればよいかをテーマとして昨年(1993年)10月12日、岡山での学会を利用して開かれた座談会の全記録を掲載する。参加者は私を含め、参加可能だった在京の編集委員(蔵本由紀、池田隆介、好村滋行)計4名+編集担当の野坂京子、および歴代本誌の編集にかかわって苦労された方々(勝木渥、山田耕作)計2名(以上敬称略)それに読者代表として若手および古手の方々計4名に覆面レスラーとして参加していただいた。なお当初、松田博嗣氏にも参加していただくことになっていたが、日程の関係上参加できなくなったので、本座談会に関して私あてに出された書状を氏の許可を得て最後に掲載する事にした。

☆☆ 「物性研究」30周年記念座談会 ☆☆

—— 午後6時25分 開会 ——

○池田研 そこにありますように、1943年に、もともと物性論懇談会でしたっけ、そういうのがあって、そこで物性の人たちの間で回覧できるような雑誌が欲しいということで、「物性論研究」というのが1943年に創刊されたそうです。編集の責任を持っておられたのは阪大の永宮先生で、途中、戦争の直後に中断したり、あるいはその直後に東大に発行場所が移ってみたい、いろいろ紆余曲折があったみたいなんですけども、その後発行場所が形式的に言えば京都に移りまして、それで山本常信先生が発行の責任をとられるようになりました。

ところが、1962年にこの「物性論研究」というのが消えちゃうわけです。それで、なぜ消えるかといいますと、「物性論研究」がどういう性格の雑誌やったかという、本論文を英字誌に掲載するというのは裨姿で論文を書くことになるわけですが、その前に予備発表というか、仲間内で発表して、とにかく反響をまず見てみようというふうな感じで投稿する雑誌だったようです。「物性研究」の歴史に関するいろんな人の発言をみると、そんなことがよく書いてあるんですけども、一口で言ってみりゃ、ジャーナル、プロGRESSの和文プレプリント的な性格がかなり強かったみたいです。

最初のうちは、投稿者の幅が非常に広がって、化学、物理、生体関係のやつもちょこっと入ってたという感じです。今みたいに物性論が細分化されてなかったということがもちろんあるんでしょうけども、投稿者の幅は非常に広がったそうです。

一番「物性論研究」が華やかだったころには生きのいい論文が載るというか、生きのいい論文を裨姿の前に載けてしまうということでして、世界的な評価を得たような論文の幾つかが本論文として出る前に「物性論研究」に掲載されて、そこでかなり激しい議論もされているみたいです。例えば線形応答理論の久保—中野理論とか、あるいはエキシト—フォノン系の豊沢理論とか、そういうものがまず「物性論研究」に掲載されて、しかる後に英字誌に投稿されているという経緯があったそうですが、だんだん—たん仲間の話を聞くというのは、皆、嫌になったのかどうなったのか知らないですけども、1962年ぐらいを境にして、そういう本当の生きた論文を投稿するという勢いがなくなってしまったということでして、ほんまに指数関数

的に激減するそうですね。それで、「物性論研究」がともかく廃刊ということになるそうです。それが1962年。

それで、1963年から発行場所が京都になって、基研のすぐ近くであったということもあって、森先生と碓井先生とそれから長岡先生の3人の方が中心になって「物性論研究」を改め、「物性研究」という雑誌名でもう一度再出発したというのが1963年です。基研は共同利用の研究所ということで、一番基軸に基研の共同利用活動の広報誌という性格を据えて、原稿が来ないんなら、編集部の方で原稿を集めようということとして、新企画として講義ノートだとか、あるいは大学特集だとか、あるいは基研での研究会報告とか、割合コンスタントに出るものを一応ベースにして、基研の共同利用活動の広報誌という部分を一番ベースに持って、それで再出発したのが1963年です。そういう意味では、今の「物性研究」の原型ができちゃったと言えますそうです。

「物性研究」10周年目、1973年に特集号があるんですけど、その特集号に63年のころからかわりがあった何人かの人の発言が載ってますけども、どれを見ても10年でつぶれるだろうという、そういう予測のもとでやってきてるみたいです。そのころから、例えば松田先生だとか、あるいは米澤さんだとか、いろんな人に編集の責任が移っていくわけなんですけど、そのたびごとに絶えず論文を集めんといかんとか、このままでは論文が集まらんようになってしまうんで、「物性研究」が倒れると、そういうことを言われながら、どういうわけか知らんけども、10周年記念というやつを3回やって、結局30周年で——10周年、20周年、3回目ですね、3回目の何十周年記念というのをとうとう出すはめになってしまったというわけです。

要するに、あるようなないようなと言ったら悪いんですが、そういうような格好ですと30年ぐらい続いてきているというのが現状です。

これが「物性研究」の過去ですが、何か補足していただけることがあれば。

○勝 木 僕は「物性研究」を非常にありがたく思っている——「物性研究」は、何か積極的にそれを使おうという気になれば、うんと門戸を開いてくれてるという気がします。

僕は物性論のいろんなオーソドックスな研究をやる上で、43年に創刊された「物性論研究」というのが非常に大きな役割を果たしたということと、それから戦後になって物性論グループをつくっていくわけですけども、それは物性研をつくらうという運動になっていくんですが、その物性論グループが戦後にまた発足する前に、戦前の物性論懇談会というのはあったわけだけど、それは「物性論研究」を出したり研究会を開いたりしてたわけですが、物性研究所をつくらうというのでもう一回物性論グループが再組織されてくると。そのときに、それが再組織

されるまでの何か結集軸のような、組織的な結集軸のような役割を「物性論研究」が果たしてきたということが、「物性論研究」の誌上にいろんな重要な論文が出たという、物理の内容としての重要性と同時に、何か組織者としての重要性を「物性論研究」が持っていたということが非常に大事な性格としてあるということが一つあると思うんです。

ただ、だんだん年が変わっていったって、ずっと年月がたっていったって物性論グループはできるし、それから論文の発表も直接英文で英文誌なり何なりにするようになると、そういうようなことで「物性論研究」ないしは「物性研究」の役割が変わっていったということがあって、非常に率直に言えば、かつてほど、かつて持っておったような重要な役割を「物性論研究」なり「物性研究」なりが果たさなくなったということは事実としてあるんだと思うんです。ただ、僕個人に即して言いますと、何かオーソドックスでないことをやり始めたときに、「物性研究」がそれを、こっちがそれを利用して何かやりたいと思ったときには、そういうものを受け入れてくれるような姿勢を「物性研究」が持ってくれてたというのが非常にありがたいこととしてあるわけです。

ひとつ僕、物性研究者の間からの聞き書きを始めたわけなんですけど、その聞き書きに基づいて「曽禰武の歩み」だとか、「広根・彦坂は異端の芽か」だとか、それから「本多の磁気理論と、日本におけるワイス理論受容の過程」だとかというようなものを割合習作的に「物性研究」に投稿して、断続的に出たんですけども、もしそういうようなことがなかったとしたら、僕自身のところでたくさん聞き書きはためてたけども、そういうことをやってるんだというようなこととか、どういうことがそれを通じて明らかになったかということをおんまり物性研究者に知らせることがないままで、それからそれを書こうとすると、またはっきりいろんなことを自分で認識し直しますから、僕自身の認識も深まらないままで、ただ材料だけがたまってたという状況になってると思うんですけども。「物性研究」がそういう発表のチャンスを与えてくれたというのは、これは日本の物性物理学史を本気になって調べようとする気になった僕にとって、非常にありがたかったです。それはたしか……。

○池田研 それは、「物性研究」になってからですか。

○勝 木 「物性研究」になってからです。僕が信州に行ってからですから、67年より後なんですね。72、3年、あるいは75、6年なんでしょう。か。（最初の掲載は、Vol. 29 No. 1, '77年10月号）

○山 田 いや、もう少し遅くないですか。僕は勝木さんが書かれた論文を読んだりもしてたから。

○勝 木 これは76年ごろから始めたんです。それを始めて、それが一つなんですね。

それから、そういう物理学史とか、それから今環境問題、物理的な目で見えた環境論みたいなものをいろいろ考えたりしてるわけです。そのときにつまり僕の講座は物性理論の講座ですから、オーソドックスな物性理論の研究教育をやる講座として本来はつくられた。そうでない内容の研究を修士論文としてまとめたときに、こんなのが物理の修士論文かといっていちゃもんがつくかもしれないと、そういうようなときにある種の権威主義かもしれませんが、そういうオーソドックスでない修士論文は「物性研究」に送ると。そうすると、「物性研究」の編集者、これは一応他者の目で見えてくれるわけですね。それで、おもしろいとすれば、「物性研究」にそれを紹介、論文そのものを紹介してくれるということがあったんで、そういういわばオーソドックスでない修士論文を書かせたりしたときのこっちの何かある種の心の重みみたいなものがあるんですけども、そこでそれを「物性研究」で取り上げて発表してくれるというので、これは非常に心強い思いがしたということがあります。

○蔵 本 物理学の雑誌に投稿しようというふうな感じは余り勝木先生はお持ちにならないですか。物理学会誌なども、割といろいろと幅を広げてそういうたぐいのものを受け入れられるような方向に少し姿勢を変えているように思いますけどね。

○勝 木 つまり「物性研究」は長さの制限を気にしないでね、入れるでしょ。ワープロで打てばね。要するにもうそのまましてくれると。前は、字で書いて打ち直してもらうときには、長過ぎるとちょっと悪いかなあと思ったりもしたんですけども、今はワープロで打っていけばそのまま載せてくれるから。物理学会誌の方は字数制限ありますからね。

○池田研 最近「物性研究」では字数制限をやかましく言うんです。

○勝 木 ああそうですか。

○池田研 そういう意味では、これはちょっと後からそういう話をしようと思ったんですけども。松田先生がきょう本来なら出席される予定だったんですけども、御都合がつかず、出席できないんですが、手紙を書いてこられまして、いろんな意味でそういう少数派、物性研究者としての少数派の研究のバックアップをするというふうに「物性研究」ははっきりとした志を持つべきじゃないかということを言っとられます。

○読者A それは松田さんが編集長の時代にそういう方針を出したんですか。「物性論研究」には、先ほど言われたように、マジョリティーの物性論研究者が投稿していて、かなり今と性格が違うと思うんですよね。今だったら物性研でやっているような研究と「補集合」にあるような物性を扱っているんで。

○池田研 松田先生が編集長をされてたころというのは63年以降ですから、むしろマイノリティーの方を支援するという時代やったと思うんです。

○蔵 本 表文化から裏文化に変わったというような言い方で、10周年の特集のときでしたね、何か松田先生がそういう言葉を使ってらっしゃいますけども。

○読者B 僕もそれは覚えてるんですけど、いつの時代だったか、物性研をつくるための組織としての役割が、57年からのやつのある時期にあったと。それと関係するんですけど、もう一度大学紛争のときというのが、ある意味で編集者側がかなり熱く燃えてた時期がありまして、蔵本先生、米澤先生、私も一枚かんでまして、特集というやつと、それから地方大学問題というのを勝木先生、先ほどはおっしゃらなかったけども、それを取り上げたのも「物性研究」です。それはある意味では、松田先生が編集長のときにそういう意識を持ってられたというふうに思います。今の段階での、今の時点での御感想だと思うけど。

○池田研 「物性研究」にはそういう役割があったということは確かにありまして、だからそういう意味じゃ1963年を境にして「物性研究」の役割というのは、かなり変わってるんですが、だけど、かといってそういう非常に強い志を持ってやったのかというと、どうもそういう節が余りなくて、むしろかなりのんびりだらりとやって——こう言ったら悪いですけども、のんびりだらりとやってるから30年もったんじゃないかという気もするんですよね。

☆

☆

☆

○池田研 むしろ、そういうことも関係して、今いろんな方に議論してもらいたいことの1つは、どうして「物性研究」が30年もったのかということ。「物性研究」は10年たてばつぶれるつぶれると言われながら30年もったということの理由も議論してもらいたいことの1つではあるんですが。

○読者B 今、自発的な投稿ってどのくらいあるんですか。

○池田研 今は自発的な投稿というのは余りありません。

○読者B 前からそれはそうなんですけど、どのくらいあるんだか、ないと言うべきなのか。

○池田研 どのくらいですか、野坂さん。大体2号に1つぐらいの割合じゃないですか。

○野 坂 あるかないかですね。

○池田研 それで、余りよくない傾向があるということが一つあります。つまり、「物性研究」というのは一応投稿すれば必ず載せてくれるということがあるので、次から次へと銅鉄主義と

言っちゃ言葉が悪いんですけども、練習問題を解くようにして、同系列の練習問題に対する答えが続いていくというようなことにもなりかねないわけです。そういうときには、我々はどういうふうに対処しているかという、もうちょっと一連の仕事がまとまって、一応ひとつ何か世界ができたと思われるぐらい煮詰まった時点で投稿してくださいというふうにして、寄稿者に送り返すということにしています。でも、いろいろ問題があるんですね。そういう寄稿者は一般の専門誌に寄稿できるチャンスが少ない場所にいる人たちであるということが一方にあります。ですから、寄稿できるチャンスをつぶしてしまうと、出てくるものも出てこんようになるんじゃないかということはもちろんあるんですね。ですけど、どう言えばいいのかな、余り無制限に出すというよりも、自分の中でためてもらって、それである程度たまった段階で投稿してもらおうというふうにした方が読者にとってもいいでしょうし、読者とのコミュニケーションも図りやすいと思うんですけどね。だから、そういう意味で無制限な投稿というのに対しては、ちょっとたがをはめるということをやっています。

○読者B それは実際に何回か投稿が続いた後で、そうやってということですか。

○池田研 大体2回ぐらいですね。で、結構おもしろいのがあるんですけどね。おもしろないやつもあるんですけども。内容が余り変わらないものが投稿され続けるという傾向があるので、ちょっとそこところは意図的にこちらの方から投稿者に向かって、こうされてはどうでしょうかということをするようにしています。

○蔵本 山田さんが編集長のときに、特定の個人の間で非常にやりとりが延々と続いたということがあって、それにどう対処したらいいかということで、随分苦労されましたよね。

○山田 飯田先生のあれはいつごろですかね。84、5年、もうちょっと後かな。

○蔵本 80年代の前半ですね。

○山田 そのときに、飯田先生はかなりおかしいことを言われたんだと思うんですけどね、それがなかなか論破できなかったというのは、全体の物性理論のレベルが低過ぎたと思うんですけど。飯田論文は近藤さんとかなり論争になって、近藤さんはかなりの的確に批判されたと思うんですけど。最後には批判するたびに修正されるので、やっぱり疲れるという話で、打ち切られました。結局、論争の形だったらしいんですけど、あとは飯田先生だけが執念深くまだ投稿されたんです。それで飯田先生のはジャーナルに投稿すると載らないとか、そういうことがあると、英文のまま投稿されて、「物性研究」ならフリーパスだろうという感じでいろいろ来られるので、たがをはめるのがなかなか難しく、随分いろいろ苦労した覚えはあるんですよ。

基本的に「物性研究」というのは投稿が自由なので、ファンみたいな人で延々と投稿される

人があるんですけどね。だけど、大部分の読者にはつまらないというか、いろんな枝葉末節的なこともあるけれども、時にはおもしろい内容が載ることがあるんですよね。それは今見ても、非常におもしろい内容のものもあります。だから、欠点をいろいろ探すというよりも、やっぱりそういう中にポジティブなもんがところどころ含まれているというのが、いいんじゃないかと思うんですよね。そういう意味で、いろんな投稿を受けたり、いろんな自由さというのを「物性研究」は持ってるので、そこがいいところじゃないかと思うんです。

今、発行部数はどのぐらいなんですか。全然減らないんですか。

○池田研 発行部数は4年間ぐらいの間、ほとんど変わってないです。

○山 田 僕、編集後記なんか読むと、京都の鴨川のユリカモメがどうしたとか、いろいろ書いてあったりして、何となくほっとするところがあります。確かにローカルな感じはするんですけど、それを東京にいて読んでても、何となくのどかな雰囲気があるんですよね。

○池田隆 その論争というのは、結局どのぐらい続いて……。

○山 田 飯田先生と近藤さんとかの話。

○池田隆 はい。

○山 田 その2人だけじゃなくて、宮原先生がまた絡んだり、いろんな人が絡んでいまして、Van Leeuwen (ファン リューウェン) の定理を知ってるかとか、そういう反論でいくんですけど、そんな定理だけでいっても反論にはならないですよね。飯田先生は具体的に古典論で一生懸命計算して出されるんで、その飯田先生のラインにのっとって間違ってるというのを示さないといけなわけね。だから、古典論でも、磁性が起こるとか、マイスナー効果が出るとか。原理的に見れば明らかに間違ってるんだけど、どこで間違えたかというのをやっぱり示さんといかんのですね。

○池田隆 そのころは、でもやっぱり読者ふえたんでしょうね。

○山 田 あのころは確かに「物性研究」が評判になりました。

○池田隆 だけど、「物性研究」ってそれで何か名が知られたというか、それは露骨に言っていると思うんですよね。

○山 田 池田さんは当時を知らんでしょ。

○池田隆 僕が多分大学に入る直前だと思いますよ。

○読者A 僕がM1のときに見たよ。

○池田隆 まだやってました……。

○読者A 最後ぐらいにね。見たという記憶があります。

○山田 だから、やっぱりだれでも間違えるんで、それを黙って見過ごしてるんじゃあダメで、やっぱりそういう論争でも何でもいいから議論するのが必要だと思います。

○蔵本 幸か不幸か、それ以来ああいうふうなことは起こってないんですけど、今同じような事態になったときに、編集部がそれにどう対処するかという、それは全然ないわけですよ、対応策というのは。

○読者C 基本的に「物性研究」というのはフリーパスだという印象を受けまして、ただジャーナルに載らなかったけど、あれに載せてくれたということ、実は近くに飯田先生がおられてよく聞かされたんで、そういうジャーナルにリジェクトされるような論文にも機会を与えるんだな、そういう役割を担っているんだなという印象を逆に持っていました。そういう印象をずうっと持ってます。

それで、それと関連して、さっき言われた少数、マイノリティー的な研究を支援する側面を持っているということと、それから基研の広報誌的な側面も持っているということも言われたんですが、その辺がどうもどう関連するのかちょっとよくわかりにくい。基研自体がそういう性格を持っているのかという意味かと、少し思っちゃったんですが、そうでないでしょうか。

○池田研 僕が責任を持って言えるかどうか知らないですけども、今は基研というのは、別にマイノリティーであろうと何であろうと、研究会に提案すれば、審議にかけて、それだけの存在理由があれば通る。これは確かにそうやと思うんですね。それが本当のクリエイティブ・マイノリティーに属しているかどうかというのは、かなり危ないところがあると思いますよ。そういう線上に「物性研究」もあって、そういう意味では「物性研究」の持つとる雰囲気と、基研のそれとは一応共通のものがあるとは思っています。

それで、そういうときに例えば山田さんがおっしゃられた飯田問題でしたか。あれは「物性研究」を試す一つの試金石であったと思うんですけど、例えば今ああいうことがあったら、どう編集部は対処するかという問題が確かにありまして。

○山田 だけど、「物性研究」というのはレフェリーはしないんだということにすれば、読者は自分自身が判断せにゃいかんということになるわけですよ。明らかに僕らが見て間違っていて、投稿者のためにもなると思えば、言ってあげるのが親切だとは思うんですけどね。リジェクトはしないんだけど、考え直したらどうですかというのはね。

○池田研 一つ考えられるのは、けんか相手を探してあげるという手はあるんです。そういうことは実際に一遍やったことはありますけども、残念ながらそれは2回か3回ぐらいでしりすばみで終わってしまって、長続きはしませんでした。

○勝 木 何をですか。

○池田研 けんか相手です。

○山 田 だから、僕は飯田先生の問題でも、本当はその大学内部で議論する人がいて、やっぱりそこを説得する人がいないといかんと思うんですよね、本来は。それぞれの教室内部でやっぱりディスカッションがあって……。

○池田研 それはようわかるんですけども。

○読者B 近藤さんを持ってきたのは、編集者側が持ってきたんじゃないですか。

○山 田 やっぱり長岡さんじゃないかと思うんですけど、長岡さんが頼まれたんじゃないかと思います。

○読者B 自発的に近藤さんが対応したんじゃなくて、近藤さんならまじめに対応してくれるという感じで、と僕はそう記憶してますけど。

○池田研 だから、けんか相手と、それからけんか相手を求める人がうまく絡まると、これはやっぱり結構おもしろいことになるんですね。ただ、皆さん時間がなさ過ぎて、そんなふうにまじめにつき合ってくれる人の数というのは極限されてくるんですよ。そんなことにかかわり合うよりも、自分の専門分野でセコイ論文を3つか4つ出す方がはるかにいいと思ってるわけですから。

○山 田 飯田先生のは古典論で磁性が出るんですけど、古典的に電子がみんな同じように回ると磁性が出るように見えるんですけどね。それは表面で逆回りになるやつがあってキャンセルするということになっててね。だけど、表面で消えるというのをみんな信じているんですけど、本当に計算した人がなかったんですよね。それで、実際に芳田先生が計算されたらしいんですよ。そしたら、やっぱり確かに消えて、文献を調べると、ずっと昔にロシアでまじめに計算した論文がやっぱり載ってるらしいんですよね。だから、そういう意味では、飯田先生だけが悪いというんじゃなくて、我々ほうのみにしてて、実際に古い済んだ議論というのはいちいち見ないから、説得できないんですね。確かにだから、ちゃんと飯田先生の議論に答えるようなことは、教育する上ではやっぱり必要なことかもしれないんですよね。飯田先生を説得できないんだから、学生が質問したときにやっぱり答えられないことになるんでね。(笑声) だから、そういう意味で「物性研究」を徹底的に論争の場にすればいいので。僕は逃げてた方なんですけど大きなことは言えないんですけどね。

○池田研 山田さんがおっしゃられるのは、例えば大学の中でそういう人がいるべきやというのは、本来の大学やったらそういう人がおって当然……。

○山 田 本来自分の仲間がそういうおかしなことを言い出したら、それはやっぱり寄ってたかって、何とかせないかんという気にならにゃいかんのと違いますか、それは。だれでも時には物すごい発見だと思うかもしれないんです。飯田先生は確信犯みたいな、新体系を発見したということだから。

○池田研 そうですね。だから、そういう意味で「物性研究」というのは、さっきから僕が言ってますけども、けんか相手を見つけることができるような雑誌になればというのが一つあるんですね、前から。

○勝 木 「物性研究」の飯田、近藤でね、議論してるうちに相当口汚なくののしり合ったりもしたでしょ。

○山 田 かなりしましたね。

○勝 木 それで、おまえは大学院の学生のだれにでもわかるようなことがわかってねえとかね、そういうことをやったんだけども、そこのけんかがむしろ読者が読んだときに、あっ両方ともかっときてけんかしてるなとか、どっちかがどうだなというのがわかるような、そういうけんかの仕方なんですよ。

それで、僕は最近、突然けんかのやり玉に上げられる方になったんですけどね。そのときのやり玉の上げ方というのが、実にいやらしい。というのは、名指しをしないんです。例えば、最近の僕がやり玉に上がった例を言いますとね、まず「続大学教師」という地人書館から出ている本があるんです。これは京都の地学を出た人が書いている本なんだけど、これは割合売れ行きがいいらしい。立ち読みで「まともな英語が書けない教授」というところを見たら、英語がろくに書けないやつは、大体日本語でも物が書けないんだというわけ。そんなやつは事実と自分の意見の区別がつかず、自分が何を言ってるかわからず、そういうやつが英語で論文書くから、日本語でもわけのわからんのを書いて、それを辞書を見て訳すからろくでもない文章になるんだと、読んでわからん英語になるんだというんですよ。そんな悪口雑言が続いた後に、僕が心血を注いで書いたうちの大学の紀要の「地球・生命・エントロピー」の英文のある部分を無断引用してやり玉に上げてね、読者よこれはどこがおかしいか考えてみよってわけですよ。

(笑声) で、文句言ったらね、いやそれはたまたま立ち読みで偶然発見したもんだから、それで文句つけたらね、「私はどこが悪いかわかりません」と。それは、つまりまじめになって、かあっと頭に血をのぼらして、お互いに大げんかするんなら、それはそれでいいんだけども、どうもだれか、ともかくあほうで抜けさくな罵倒の対象をつくり上げるんですね。それを材料にして、読者と一緒になってそのばか者をやっつけて、読者もそれをさかなにして、こん

なあほうがおるかといって、心楽しくなると。それで、読者が著者と一緒になって人を馬鹿にするという、そういうような何かあほうをつくって、一緒にやり玉に上げて楽しむというようなある種の論争スタイルが、最近出てる、それが一つね。

それからもう一つは、「科学」の85年の9月かな、あそこでやっぱり勝木というオタンチンがこんなあほうなことを言っとるということを、大変立派な宇宙物理学者が「科学」の85年の9月号でやり玉に上げてる。それもさあっと見るとね、つまり阿呆な攻撃相手をつくって、その阿呆に対する攻撃を読者と一緒に楽しむというような感じの、そういうスタイルの論争と、論争というか批判というか、やっつけると——それがちょっとこっちがやり玉に上げられたせいもあるかしらんけども、感じられてね。それに比べると、近藤、飯田のチャンチャンバラというのは、実に気持ちがいいというか……。

○山 田 あれは真剣勝負ですからね。

○勝 木 真剣勝負だね。

○山 田 それで、飯田先生は物理学会で発表されるんですよ。だから、本当はおかしなことを言ってりゃ、学会だからだれか批判せんことには始まらないと思うんですよ。だから、最終的にやっぱり座長の責任だと思うんですよ。何の批判もなしにそれを聞き逃がすということとは、学会として承認したことになるでしょ。

○池田研 話がおもしろい方向に発展していつているんですが。

○山 田 いやいや、「物性研究」に戻ってください。

○池田研 ちょっと「物性研究」に、時間の制限もありますし、「物性研究」に戻していただきたいんですけども。

☆

☆

☆

○読者B 今の論争に関連しましてね、コメント欄というのを私、ごく最近知ったんですけども、おくれればせながら。泥縄で読んだときに初めて知ったんだけど、おもしろい企画だと思うんですけども、今のところあれはやらせというか、やっぱり依頼原稿なんですか。

○池田研 今は完全にやらせです。やらせで、一応「物性研究」の宣伝になりますけども、1つはあれですね、特別寄稿というような格好で、クリエイティブ・マイノリティーというのかどうか知らないですけども、比較的売れてないけれども、非常におもしろいことをやっていってしゃると編集部が判断した人の論文を寄稿してもらって、解説してもらうということをやっ

てるわけですね。それはもともともうちょっと意図がありまして、それを誘い水にして、今度は例えばドクター論文ぐらい書いた若い人が、おれはこれぐらいのことをやったんだから、ほかのやつもちょっと耳を傾けてもええだろうというような感じで、自分の論文をどんどんどんどん寄稿してくれるような、きっかけを与えるような呼び水という感じで始めています。まだこれは呼び水だよというふうな言い方はしてないんですけども。それをきっかけに何か論争みたいなものが起これば、これはおもしろいんじゃないかということもありまして、特別寄稿で書いてもらった論文の後に、だれかコメントしてくれればいいというふうなつもりだったんですけども、そういう人は当然出てきませんから、何人かの、この人なら一応まじめに評論してくれるだろうと思う人に頼んで、評論してもらおうということをやっています。その後で時には寄稿者の反論が載って、それに対してまた別の人が絡んできてというふうにして、どんどんどんどん絡んでいくとおもしろくなると思ったんですけど、なかなかそうは転がってくれないですね。だから、そういうふうに論争が自己組織されるような場をつくったつもりなんですけども、私たちのやり方が多分どっか悪いんだろうと思うんですがね。

○蔵 本 最初、あんまり立派なコメントを書かれると、後が続かないですね。

○池田研 いや、僕はそれだけの問題じゃないんだろうと思うんです。何か僕らが提案する仕方にやっぱりちょっと問題があるんじゃないかと思うんですね、編集部の方でね。その角度が僕らはよくわからない。つまり、どういうふうに見せれば、みんなが転がってくるのかといううまい寄せ方というか、からみ棒でもこう置いといて、そこを中心に絡まってこいこいというトンですが。

○読者A 好村君のコメントを読んだときに、非常にマイルドというか、何かすごく立てているんですね、著者を。すごい紳士的過ぎて、それでは絡まりようがないですよ。(笑声) だから、もうちょっと何かいちゃもんをつけるように。

○蔵 本 Aさん、書けばいい。

○池田研 なかなか自分がコメント依頼されるということになると、やっぱり立てざるを得なくなるということはあるんですな。

○読者A そうなっちゃうとは思っただけど。

○池田研 だから、できるだけ素人っぽい質問をするように、余り専門家には言及してもらわないというふうにしてはいるんですが、専門家でない人は書いてくれない、その辺がいろいろ難しい。(笑声)

そういう話をすると、これはD氏に聞きたいんですけども、Eメール討論というのは、あれ

はからみ棒といいますか、うまいこと絡んだんですね。

○読者D あれは本当に半分はけんかですね。

○池田研 ちょっとこちらの質問なんですけど、そのようにうまいこと絡めていくこつというのがあると思うんですね。あれはEメール討論という形をとってるんですね。Eメールというのは人に見られているようで人に見られていない。ところが雑誌というのは、人が全部見ちゃうわけですね。一たん発行されたら、それは衆人の目のもとにさらされる。そしたら記事は完全にひとり歩きするわけです。雑誌の場合だと。だけど、Eメールの討論というのは、そういう意味ではちょっと、ちょうど位相が公開の場で雑誌で投稿された記事と、それから私ごとですね、私語ですね、プライベート・コミュニケーション、ほんまのプライベート・コミュニケーション、そのちょうど幾何平均ぐらいの位置を占めててね、それで見られているようで見られてないという、そういう独得のあれですね。

○読者D どうでしょうね。大体あのEメール討論を載せてしまったというところ、途中から載せるというふうには全員に言ったんですけど、ただ最初のうちは何か全体にEメールでやりとりしてるというので、大体出す人はかなりプライベートな感じで書いていると思いますね。だから、それもそのまま載せちゃったことで、かえってまずいということはいろいろあると思うんですね。で、逆に最初から載ることを知っていたら、ああいうふうに書けなかったということもあるんじゃないかと思うんですね。だから、Eメールはまだ何かよくわからないですね。多分手紙ほどフォーマルではないですね。ところが、電話よりはもうちょっとフォーマルですね。

○池田研 書き言葉に一たん直すというのが……。

○読者D ところが、その感覚が時々難しいんですね。普通にEメールを交わしていても、何かちょっとしたことが誤解になって、急に怒り出してしまう。これは別に親しい間でもよくあるんですけど、そういうことはよくあるんですね。それは多分電話の感覚で書いて、手紙の感覚で受け取ったりすると、よく起こることじゃないかという気もするんですね。だから、もう少し我々がEメールというものになれないと、ああいうのはうまくいかないんじゃないかという気も若干するんですね。

○蔵 本 Dさん、ああいうのは今度の研究会ではやられない？

○読者D 今度は別の人が中心でやってるから、その人がやるかどうかなんですけど、今のところ去年でみんな疲れたというのもあって、(笑声) 今やるかどうか、多分やらないんじゃないですかね。

○読者C あれは非常にやじうまとしてはおもしろく見ていたんですが、明らかに載らないことで、コマンド一発で消えることを前提として……。

○蔵 本 そういうものが載ったからおもしろい。

○読者C 僕が例えば、ああいう討論に参加して載せられたら、怒り出しますね。よっぽどあれコメント欄に投稿しようかと本当に思ったんですが、そういうことをやっていいのかと。

○池田研 ああ、それはぜひ投稿してくだされば……。

○読者D 一応全員の許可は得たんですよ。このまま載せるけれどいいですかといって…。

○読者C 私だったら拒否しますね。

○読者D 拒否した人がたまたま出なかったと。

○池田研 僕がその話を出したのはどうしてかという、討論の場なり、テーマを出すにしても、出し方によってやっぱりたくさんの人が絡んでくると思うんですよ。

○読者A あの場合、Dさんが最初に送った人じゃない人が、僕なんですけども、絡んできたのは、ワンクッションあって、その人がディストリビューションしちゃうんですね。Eメールだから簡単に一たんファイルを持ってきて、それからまた別の人に送ることができる。そこがちょっとみそというか、多分最初のDさんが送った先だけで、話を閉じさせてたら、そんなに絡まなかったような気がするんですけど、どう思われますか。そうは言い切れないところもあるけど、もちろん。

○読者D 私の範囲内でかなり絡んではいましたけどね。

○池田研 あれはプライベートであるということを前提にした上で、皆さん絡んでいるわけですよ。

○読者D ただ、途中、いつの段階だったか、わりと早い段階からそれを載せるという計画は言っていましたから、多少は意識してたとは思うんですけど。最後にもう一度載せますよということを言ったわけですけど。

○池田研 この間、ある本で発見したんですが、——これは「物性研究」の編集会議でも話したんですが、——イギリスに19世紀のころから「ノーツ・アンド・キューアリーズ」とかいうおもしろい雑誌がありまして、それはどういう雑誌かという、投稿者がとにかく何でもいいから、自分が知りたいか、自分が非常に不思議に思ってることを投稿するそうです。それを見ると、読者の中で博学な人は、こういうのはこういうところにあったとか、これは実はこんなふうに解釈できるんだというふうにレスポンスするそうなんですよね。それをまた違うフェーズで絡んでくる人がいるとね、いやあ、おまえの言っとることはそれだけじゃないんだというよ

うな格好で、また違う方向からそいつに絡んでくるやつがある。そんなふうにして、編集責任者はそういう場を与えるだけなんですけども、そこに何人かの人が絡んできて、それで質問者とそれから応答者、あるいはそれに対してアドバイスを述べる人というのがうまく絡んでいって、うまくすると10人ぐらい、10個ぐらい論文がずるずる続くという、そういう雑誌があるらしいですね。それはどこの図書館にも備えつけてあるようなポピュラーな雑誌で、別に自然科学だけじゃなくって、いろんな分野に多岐にわたっているようです。そういう意味では、ほんまに好奇心だけを相手にしているという雑誌なんですよね。そういうのがイギリスの中でちゃんと成立している。こんなをモデルにしたいなあと思うんですが、なかなか「物性研究」ではできない。何でかというと、物理でやっとなやつは、どうも皆、プロしかいないというか、ということもあるんですね。ただ、数学だったら「数学セミナー」なんかはかなりそういう雰囲気があって、今は大部変わってきているみたいですけど、もともとはアマチュア的な人も参加できるという、アマチュア的な人がむしろ主役を占めるという、そういう編集方針でむしろ成立しているみたいです。

☆

☆

☆

○読者B 勝木先生が言われた“マイノリティーを”ということでもって絡むことだと思うんですけども、日本語へのこだわりというのは、なぜこだわるのかということについて、今、編集部の見解はどういうふうに考えておられますか。僕は非常に大事なことだと思っておりましかれども。

○池田研 いや、それはやっぱり日常言語を大切にしたいということじゃないでしょうか。要するに極端に言えば、日本語で表現する場合に、概念的なことを全部漢語を借りて表現せにゃならん。最近やったらもっとひどいことに、僕も時々やりますけど、横文字がそのまま日本語に転化したようなものを借りてくると一応皆さんわかったような気分になるということを使っちゃうんですけどね。そういうことはできるだけやめにしたいということはあるですね。だから、要するに自分の持っている何か土の言葉でもってしゃべれるような雑誌になりゃ、そりゃ一番いいという。ほかの人はどう思ってるか知らないですけど、僕はそういう意味で日本語にこだわります。

○読者B 僕は非常にそこが重要だと思ってるんですけどね。それは例えば久保先生のある論文のところを覚えてるんだけど、英文の正式な発表とみなされてる方で読んでも感じない感動

を日本語で読んだ方の中には感じるということがあるんです。それは今覚えてるのは、アイジングモデルについて「モデルのモデルを私は好まないが」という言葉を覚えてるんだけど、ハイゼンベルグモデルがモデルであって、アイジングモデルをもう一度モデル化したものとして言っている。そういう言葉だの何だのというのは、正式な発表と称するものではみんな消えてるわけですね。本当は思っていることがすべて表現——国際語で表現できればよいのだが、どうしても語学力の問題なり、あるいは文化の違いとして表現できないところというのが、あって当たり前だと思うんです。既にメジャーになっている分野でやるならば、大体お手本があるから、英語で表現するというのも適当な努力でできるわけだけども、本当にオリジナリティーのあるものというのは、母国語でないとだめなんじゃないかという気がするんです。日本語にこだわるということが非常に重要な要素だと私は思ってるんです。

○蔵 本 僕も日本語には前からこだわってるんですけど、10周年の特集のときも、勝木先生がたしかお書きになってて、その点についてお書きになってたと思うんですけども、やっぱりそういう西洋文明の中で出てきたサイエンスというものは、単に論理性だけじゃなくて、いろんな感性的なもんを持っていますから、そういうものを大和言葉の感性でとらえたときに、やはりある種のずれが出てくるんですね。そのずれから何か新しいものが出てこないかということとを期待してるわけですね。

○勝 木 僕はもう一つは、日本語に対する我々の責任というのを感じてて、つまりヨーロッパ語で適切に表現できるような、そういう概念なり観念体系なりがあるわけですね。

○蔵 本 日本語を鍛えるというね。

○勝 木 それを日本語で表現することによって、日本語そのものがそういう表現力を身につけると。その日本語の表現力というのは、実は加藤周一の「日本文学序説」かな、何かで例えば空海がこういうことを表現したと、そのことによって日本語がある種の論理的な表現力を身につけたとか、そういうようなことを、いろんな歴史的にどういう文章が書かれて、そのことによって日本語がどれだけの能力を身につけたかというような見地からの解説が、上下2巻だったんですけど、それが非常に印象に強くて、それで……。

○蔵 本 日本語が単に英語的な機能を持つようになっただけでは不足なんで、やはり英語にない感じのとらえ方というものがあって、そこにずれがある。そこが重要なんじゃないかと思っていますけど。

○池田研 これは僕の感想ですけども、あんまり日本語で書くというメリットの発揮された論文は載ってないですね。

○蔵 本 いや、それは載ってないことないと思うんですよ。やっぱり無意識にそういうことはやっていると思うんですよ。日本語で論文書けば、いや応なしにそういうことを考えざるを得ない。それは非常に下手な日本語であっても、それなりにはやってると思うんですね。

○池田研 それはそうなんですけどね。そやけど、論文を日本語で書くということが確かに意味があるんだというふうな言い方をしたときに、読者が乗ってくるような、そこに意味を見つけて寄稿してやろうという……。

○読者B かわいそうだよ。編集者の立場でそれはわかりますが。

○池田研 そういうふうに乗ってきてくれる人がどれぐらいいるのか。日本語で投稿したいという人をふやすには、どういうプレゼンテーションを編集者としてやればいいのかというのは、いつまでやってもわからないですよ。さっきEメール討論の話を出したのは何でかという、Eメール討論というのに確かにたくさんの人が乗ってくるというのは、あれには独得の位相があって、表現手段が自分の日常言語でもあるし、一方、ともかく相手がいるわけなんだから、相手とコミュニケーションしなきゃいけない、そういう部分も半分あるんだし、しかもそれもしゃべり言葉じゃなくて書き言葉になって、一たん自分の目の前で見えるわけです。書かれた言葉は喋られた言葉と全然違ってきますから。だからそういう出され方をしたものとしてEメール討論みたいなのが続いたというのは、非常に僕は興味あったんですね。

○読者D ただ、これはスピードの面も必要なんです。レスポンスが、例えばあのコメント欄とかのように出て、次の号とかでまたというタイミングではだめですね、それはぱっぱぱっと進まなきゃ。いろいろフェーズラグを生んでめっちゃうちゃになっちゃうということもよくあるんです。

○蔵 本 一昔前は、和文の論文というのは、やはり英語の前段階というか、劣ったもんだと、やがて英語としてちゃんとなるべきものがまず前段階として和文という不十分な形であるというふうな、そういう認識のされ方だったんですけど、これだけ欧文の論文がはんらんしてきますと、むしろ和文の論文の貴重さというか、英文で表現できないいろんなニュアンスとか、我々の持っている身体的な感覚とか、そういうものが微妙なところが和文で表現できるという、そういうメリットがだんだん見直されてる、そういう傾向も出てきていると僕は思うんですけど。貴重だと思うんですよ、和文の論文というのは。

○読者B 日本語での教育というのが、国際的にもやっぱり意味を持ってるわけですよ。だけど、物理はある意味じゃ、もうちょっとそこにギャップが、最先端とはギャップがあると信じて、日本語はインターナショナルなランゲージではないんだと決めてかかっちゃって、プ

ライブート・コミュニケーション扱いと考えてるけども、それは本当に正しい態度かどうかはわからないですね。

○池田研 うん、だから、それはある程度表現者としてのトレーニングを積んだ人にはわかると思うんですけど、むしろ寄稿してもらいたい人はそういうでき上がった人じゃなくて、若い人に、むしろ舌足らずな文章でもいいから、自分はこれだけの世界をつくったんだと、だからそれをみんなに知ってほしいと言いたい人に寄稿してもらいたいわけです。それはその人の言葉で書けると思います。そんな人たちに、ここやったら出してもええという感じにするにはどうすればいいのか。若い人はどう思われますか？ 好村さん。

○好 村 実際問題として、英語で投稿されてきた修士論文があるんです。それを日本語に、多分そのまま訳されたと思うんですけども、正直言って気の毒な感じはやっぱりしましたし、編集部もちょっとつらい感じではありました。しかし、特に学生の人たちにとっては、そこまでなかなか日本語の大切さが実感できないのが現実で、余裕があれば英語を書こうという雰囲気はどうしても否めない感じがあるんですよ。

歴史はよくわからなかったんですけど、多分「物性研究」が何となくずっと最初から守ってきているものというのは、来る者は拒まずということが一つあると思います。これはちょっと後で議論したいと思ったんですけど。それと二つめは日本語ということで、かなり日本語ということにこだわっているみたいなんですけども。本当にそれを守っていくか、もう少しフレキシブルにするかということは、僕自身ちょっとよくわからないですけど、確かに今後の編集の立場からすると、結構ポイントのような印象は持っております。

それで、ちょっと質問したかったんですけども、過去でレフェリーというまでもないんですけど、来たものに対してリジェクトするとか、そういうシステムをつくるとか、そういうことでの議論は一度もなかったんですか。一度僕は、何かレフェリー雑誌にするという動きがあったということを、ちょっと聞いたことがあるんですけど。

○池田研 僕は知らないですけど、そういうことがあったんですか。

○山 田 聞いたことがないですけどね。

○好 村 ああないんですか。

○池田研 レフェリーにするというよりも、編集部がどれぐらい論文に対して、これはいいとか悪いとかという判断ができるのかということが問題になったことはありますけどね。明らかにエラーがあるというのは、やっぱり出すことはできないだろうということはあるから。

○山 田 その程度だと思いますけどね。やっぱり著者にとってもよくないだろうということ

がわかればね。

○好村 大体、学生と話をしていると、非常に現実的で、やっぱり書いてもポイントにならないといいます。それはプライオリティーがないからだそうですか、ちょっと寂しい面もあります。

○読者B そういう意味で、全部をレフェリー制にしちゃうんじゃなくて、レフェリー制を望む投稿に対してはするというような考え方もありますか。

○蔵本 だれかに見てほしいという……。

○池田研 レフェリーをむしろ指名ないし、指名はしないけれども、投稿者がレフェリーを求めると、こちらでお世話することはあり得るんじゃないかと思いますね。でも、そういう格好の投稿というのは、ないことはなかったと思うんですが。特に物性の人に見てもらいたいという感じの他分野からの投稿はあります。

○山田 ですが、余談ですが、あれは一貫してプライベート・コミュニケーション扱いにしてくださいというのが後ろに書いてあるでしょ。だから、論文にはならないことになっているんですよね、と思いますけどね。

○読者C 実際には「Bussei Kenkyu」とローマ字で書いて引用されることはありますね。

○読者A 先ほど始まる前にちょっと個人的に言ってたんですけども、「素粒子論研究」と比較したときに、ちょっと野坂さんが先ほど言われたように、「素粒子論研究」にはプライベート・コミュニケーション扱いにしろという文章がない。どうも、素粒子論の内々ではそれなりにプライオリティーを認めているような感じも受けるんですよね。例えば、歴史的なことを言うと、朝永さんが最初に繰り込みの話を言い出したときに、まず「素粒子論研究」に載ったはずで、多分シュウインガーのがその次に「フィジカルレビュー」に載ったんだけど、英文の論文はシュウインガーよりも後だったような気がするんです。でも向こうの方は日本語で書いてるけども、そのプライオリティーを認めてくれたからノーベル賞につながったというのが、一つ昔の例で言うところがあります。それから最近でも、これは外国ではどうなのか知らないけど、九後汰一郎さんのドクター論文は、九後さんの最近書かれた教科書でもご自分で引用されているし、あれはかなりまとまった内容で、何で英語で書かれなかったのか私はよく知らないけども、それも少なくとも日本人の素粒子論の人たちの中では結構評価が高くて、物性の人でもある程度知ってるような話です。それを多分「Soryushiron Kenkyu」ということで、ローマ字で引用してるんだと思うんです。そういうことは「物性研究」では可能のような気がするんですけど、どうなんでしょうか。

○池田研 大分歴史が要るでしょうね。

○読者A 歴史はもちろん要りますけど。

○池田研 文章にはなってないけども、暗黙の内に物性論のコミュニティー全体が「物性研究」に投稿された論文のプライオリティーを認めているという事情があれば話は違うんでしょうがね。素粒子研究のコミュニティーは物性に比べて狭いから、そういう合意が成り立ちやすいんじゃないでしょうか。

○読者A 狭いですね。それからもう一つは、多分向こうはマジョリティーなんですね、「素粒子論研究」が。

○池田研 まあそうなんだろうと思いますけども。

○読者A 京都が中心というところがあって、「物性研究」の場合は物性研に対するマイノリティー。

○池田研 むしろマイナーなやつを愛してるということがありますね。

○読者A それはあると思いますけどね。

○池田研 だから、僕は「物性研究」でそういうプライオリティー云々が言われるためには、物性論のコミュニティーは余りにも広過ぎるんじゃないか。素粒子、原子核と宇宙論以外は全部、物性研究という感じになっているんだ。

○蔵 本 いつのころからかそうなったんで、20年前だと物性という名前で非常に何かアイデンティティーがあったんですね。同胞精神というのがあって、大学院のときに初めて、まさに前プログレスの和文プレプリントとしてD1かD2のとき出したことがあるんですけども、その当時はずっと今より狭かったですから、物性はね。ちゃんと偉い人がいて、全体を見渡せる人がいたんですね。それで、若い人にもそこに出したら見てくれると、適切な批判なり、多くの人が同じ世界を共有して関心を持ってくれるという機会があって、それで非常に、今の時代はあれでしょう、自分の書いたものが活字になるということは、全然ありがたみがないと、デスクトップパブリッシングの時代にね。(笑声) あの当時は、それが何か物すごく厳粛なことのように思いましてね、そういう喜びが物すごくありましたね、初めて自分の活字が見れる。

それと、やはりいろんな人が関心を持ってくれると、偉い人がちゃんと見ていてくれるというふうな、今それだけの人がない。それはしょうがないですね。それは若い人にとっても不幸じゃないかなという気がちょっとしてるんですけど。物性がそういうふうになっちゃった。

○読者C 研究所の性格として、基研と物性研があんまり互いに別々の方向に行き過ぎて、それがかきまぜる効果が……。

○蔵 本 それはそれぞれの個性を発揮したんでしょうけれどね。

○読者C よく言えばそうですけども。

○池田研 物性はますます今後そうになっていきそうな気がするんですな。おもちゃ箱をひっくり返したように、だんだんだんだんっていくんじゃないかという、僕は気がするんですけども。だから、そういうことを前提とした上で、過去のことをあれこれ言うても僕はしょうがないと思うんですよね。そういうことを前提とした上で、やっぱりある程度議論していかないと。

○蔵 本 過去がよかったんでしょうね。

○池田研 過去だったら、「素粒子論研究」になれるチャンスは多分あったんだろうと思いますけども、物性の学問上の性質として、そうならなかったということはあるんだと思います。だから、例えば編集方針をどうするかということと言い出すと、ひとつは物性というのはおもちゃ箱をひっくり返してしまったようなもんなんだから、特に編集方針は決めないで、待ちの姿勢でもって論文が集まってくるのを待つという姿勢で行くべきなのか。先ほど言いましたけど、30年も「物性研究」が続いたというのはそういうのが重要な理由だったんじゃないか、そのことと、物性研究が果てしなく広がっていったというか、その中心、核心部があるようになってしまったということ等が、妙につじつまが合ってるような気がするんですけども。その対極として、非常に意図的編集方針を持って、物性研究というのはここまで細分化してしまったんだから、もうちょっと横方向に全部いろんな分野をスキャンするように意図的にやれというのも一つの方針としてあり得るでしょう。あるいは、今後発展しそうな非常にマイナーな部分を特に目をつけて支援せえというのも、一つの編集方針と言えるでしょう。あるいはこれは松田先生もおっしゃっておられますが、これもなかなか難しいんですけども、意味のあるような失敗作というのが平気で投稿できるような雑誌にできないかというふうに、むしろ編集方針を強く持てと。編集方針として非常に強い意図を持ったような編集方針にすればいいのか、それとも待ちの方針で特に編集方針を決めずに、「物性研究」というのはこのままで行こうというふうなのがいいのか、僕は編集者としていつもその態度で非常にわからなくなることがあるんです。

○読者B さっきの利用するつもりであれば非常に便利なものだという側面を宣伝しちゃっていいものなら、一つはもう少し宣伝してもいいかもしれないですね。ある意味じゃ、場合によっちゃ歯どめかけなきゃいけないかもしれないけども、そういう意識を持ってる人というのは、ある意味じゃまれかもしれないんですよ。

○勝 木 多分まれなんでしょうね。

○読者B 多くの読者の中では。

○蔵 本 利用価値があるというのは、一定の広がりを持って読者層をいつも安定的に確保しているという前提があって、やはり利用価値が出てくるんですからね。

○勝 木 確かにあれですよ。聞き書きに基づいた物性物理学のあれを書くときもね、科学史研究とか何とかなら、これは何か論文として認められるということはあるかもしれないけども、本当に読んでくれる読者がいるかどうかという問題があるわけですね。それから、物性研究者の間にそういう歴史への意識みたいなものを持ってほしいということもあったから、そういうのでそこを使ったということはある。

○池田研 ある意味では、「物性研究」という雑誌は、こういうものを提示したいんだという意図が非常にはっきりしてると思うんですよ。そういう原稿は「物性研究」にどんどんどんどん投稿してもらっていいと思うんですよ。

○勝 木 逆に言うと、そうやって「物性研究」のいいところを利用しようという人があんまりなくなっているということの方が問題かもしれないですね。

○池田隆 そうだと僕もそう思いますけども。だから要するに、何か自分の内輪の人間以外に自分の意見を求めるというか、自己主張、極端に言えばけんかをふっかける人がいないですよ。余りこういうことを言っちゃいけないのかもしれないけど。

☆

☆

☆

○池田隆 例えば、僕なんか割と何か自分に近い研究者と勝手に手紙のやりとりなんかしょっちゅうする方なんですけれども、そういうのを多分みんな最近好まないのかなあと思って。さっきの話ですけど、Eメールの話なんていうのは、僕なんかすごくうらやましかったんだけど、（笑声）極端な話。だから、やっぱり何が違うのかわからないんですけどね。そこら辺が、だから何か全体、要するに全体の最近の傾向というか、それを踏まえて対処しないと、何も解決策が僕は出てこないような気がするんですよ。要するに読者の中心はほとんど若い人になるべきだから。

○池田研 確かに研究するときに手紙のやりとりというのは余りしないですね。だけど、本来はそういうふうにして研究を進めていくべきことなんだろうと思うんですけども。手紙を書く場合は、あくまでプライベートだよという線がどっかに引かれているでしょうけど。手紙書く気持ちというのが、もうちょっと延長されると、日本語で自分の作物を目いっぱい表現して、

いろんな人に知ってもらいたいという気持ちになるんじゃないかと。だから、手紙書かないということは、要するに自分の作物に対する真剣な意見を求めないということと余り変わらないでしょうし、意見を求めないということは、自分の方が逆にそういうものを発表したいという内発的意志がないということになるんじゃないか。大体手紙を書くというのは点にならないですね。

○池田隆　ならなくていいわけですね。

○池田研　だから、点にならないものをわざわざ投稿できるかどうかという問題ですね、おっしゃりたいことは？

○池田隆　だから、それは多分性格の問題もあるんだと思うんだけど、例えば、僕なんかは英語で論文を書いても、自分の言いたいことを全部言えなくて、それで歯がゆくてしょうがないから、結局そういうことになるんですけれども。それがだからもっと何か余り変な労力を使わずに、こういう雑誌があれば、そういうやりとりが何か自動的にできるとしてもらえれば、一番、そういうふうに使ってもらえれば、いいわけですね。だから、そういう気になってくれる人がいないことが、一番問題だというのが僕の結局の結論なんですけど。

○山田　ほかの分野は知らないですけど、僕らの知ってる凝縮系の理論だと、やっぱり将来非常に不安だと思うんですよね。どうなのか、価値判断に関する議論がほとんどないんですよ。

○蔵本　だからメタサイエンスみたいなものでしょ。

○山田　本当は非現実的なモデルで計算しているのもあるし、やはりいろんな重要な問題というのは、どこが的を射ててどこが的を射てないかというようなことが、やっぱりあると思うんですよね。僕なんか思うと、その辺があいまいになってて、それは若い世代だけに限らず、古い世代があいまいだから、若い世代もあいまいになっていると思うんですけどね。だから、このまま行くと、混沌となってしまう。だれかちゃんと価値判断する人がいるというのが一番いいんですけど、なきゃないでお互いに討論しながら、突き詰めていくというような姿勢が必要です。やっぱりそうやってみんな育つんでね。それがだから論文一つ書くということよりも、そういう訓練をするということの方が、長い目で見りゃ、本当は大事だと思うんですよね。そういう場が正式のレフェリー付きの雑誌では、余計なことを書くとレフェリーにひっかかるし、反対意見の人がレフェリーになりゃ通らないしね、だからそうすると、やっぱりそのない何かおとなしい論文をいつも書くということになってしまいます。積極的にやっぱりそういう議論をしようという姿勢を持った人をできるだけふやして、「物性研究」の誌上でどん

どんやればよいのですが。

○蔵 本 結論的に言えば、「物性研究」の一番期待できるところというのは、そういうことじゃないかと思うんですけど。今の時代というのは、物すごく情報がある意味では豊富ですけども、やっぱり貧困な情報というのがあるんですね。得がたい情報というのがあるんですね。そういうものは今、山田さんがおっしゃったようなことだろうと思うんですよね。例えば、一つの仕事の舞台裏みたいなこととか、それから今おっしゃった価値判断とか、そういうふうなものを、こんだけ情報があふれているのに、もうちょっと欲しいんですよね。

○池田研 それに絡むかどうかかわからんですけど、情報というのは初めて自分がこういうことを得たため、人に知ってもらいたいという内発的な意思があって初めて情報になるものでしょ。

○山 田 だから、そういうほとぼしるもんがやっぱりないのやね。そこが問題なんやね。

○池田研 ないということは、これは客観的にあるんです。確か隆介氏や好村さんなんか言われたけども、プライオリティーが保証されない雑誌に投稿しても、点にならないと考える若い人が多いと言うんだけど、だけど僕はそんなことはないと思うんですけどね。要するに、うまいこと表現したいという心はだれにでもあるでしょうから、こっちがうまいこと鏡を持っていけば、相当現実的な若い人といえども、投稿する気にさせることができるんじゃないか。でも、鏡を持っていく角度がわからないんですよね。

○好 村 参考になるかどうかかわからないですけど、ほかの日本の雑誌と「物性研究」を比較して、例えば学会誌とか、「固体物理」とか、ああいうのは、もし書けと言われたら、やっぱり喜んで書くみたいなんですね。で、気合いを入れて書くんだけど、「物性研究」は嫌がられるという……。 (笑声) 「物性研究」固有の問題もあるのかなと、ちょっと思ったこともあるんですけどね。

○読者C 個人的に「物性研究」をうまく利用させてもらったと思っているのは、コンピューターのプログラムを書きまして、あれはもちろんオリジナルな意味での論文で全然なく、非常にテクニカルなものなんですけど、物性の研究の中のまだ限られた分野なんですけど、非常に汎用的に使えるんで、実際ずうっと使われているんですけど、載せていただいて、その宣伝効果が非常に大きかったと思っています。そういう意味で、テクニカルレポートとしては非常に使い道が大きいというような気がします。

○池田研 それだけだったら寂しいですね。 (笑声)

○読者C いや、もちろんそうですが、そういう使い方もあると。

○池田研 そういう使い方もあるんだけど、割合そういうのを知っている人は少ないですね。確かにそれはあるんですね。だから、論文にするわけにはちょっといかないんだけど、いろんな人に知ってもらいたいということなんです。だから、それをやっぱりCさんは、おれのこのプログラムを知ってもらいたいと思ったから書いたんで。だから、そういう意図があれば、僕はやっぱり書くと思うんですよね。それは別にプログラムに限ったことじゃなくて、自分が表現したことは何でもいい。例えば、ドクター論文ぐらい書いた人やったら、そしたら自分がこれだけのものをつくったという気持ちはあると思うんですよね。だから、それをちょっと人にわからせるように英文という格好のかみしもを脱いで、自分が洗いざらい失敗作、失敗した分もあり成功した分もあり、それも何か全部出してもらったような格好で書こうという気にはさせようと思ったら、どないしたらいいのかと。

○読者A 高安さんのドクター論文が「物性研究」に載りましたよね。あれはかなり「物性研究」としても売れたんだと思うんですけども……。

○池田研 それは知らないですけど。

○蔵本 売れました。

○読者A 売れましたよね。僕はM1、2になるかならないかぐらいのときにありました。ただそのすぐ後で本屋がそれを見て乗っかっちゃって、朝倉書店から出て、それが物すごいベストセラーになって、「物性研究」の功績は全然忘れ去られてしまったんですよね。だから、その辺の商売の下手さというのが何かあるような気がしますね。(笑声)

○池田研 そんなふうに使ってもらって、僕はええと思うんです。そんなに売れるか売れないかはさておいてね。

○読者A まあさておいて。彼はうまく使ったんですよね。

○蔵本 いや、あれは僕が編集委員の時に、僕からお願いしたのです。

○池田研 自分の仕事を知ってもらうために「物性研究」を積極的に使ってもらおうというのは、非常に歓迎されることと思うんですけどね。だから、それをどっかで「物性研究」の意思として表現せんといかんと思いますけど。(笑声) 物理学会誌に、「物性研究」はこういう論文を求めていますという格好で広告を出すのも一つの手かもしれないですけども。だけど、あんまり、その辺の雑誌がやってるのと同じようなテクニックでやるのは、どうもちょっと釈然としないところはあるんだけども。

○勝木 それから、載せた論文への反響というようなのがあんまり載らないんですね。で、実は茅さんのことをうちのマスター論文でまとめた人がいて、それに対して網代さんですかね、

Y. A. と書いてたから網代さんだと思うんだけど、それが編集後記で非常に綿密に調べてるんで感心したなんていうようなことを書いてくれたことがあるんですよ。それはそのコピーをとって、書いた本人にも送ったりしたんですが、そこら辺の何かちょっと一言、二言のコメントがあると、大いに励みになる。

○池田研 コメント欄がそんなふうに使われるというのはほとんどない。編集委員以外の人があそこにそういうことを自発的に、これはおもしろかったからという感じで載けてくれるというのは、なかなか難しいですね。

○勝 木 それで、僕は「地球・生命・エントロピー」書いたでしょ。あのときに何か返事か何かはがきで来てね、だれかからこんなに熱入れて書いた論文を見たのは久しぶりだとか初めてだとかというコメントがあったということを、それに書いてくれていたことがあって、それは割合うれしかったということはあるんですけども。おもしろかったというようなことがあったら、小まめにそういう応答があると、また書く人も張り切って書こうということになるかもしれない。

○読者D 応答という点と、さっきの若い人が最近出さないという点でいいますと、僕よりもっと若い人になると、電子メールの使い方がはるかになれてますね。彼らにとっては生まれたときから——生まれたときからというか、そういう生活に入った途端にあるから、ずっとそれでかなりの量を、同世代のレベルではやりとりをしてるんですね、電子メールで。だから、もし若い人が参加するというんだったら、例えばコメント欄も、論文が出たら、それに対するコメント欄を電子メールの何とかというセクションを設けて、そのセクションに投稿して、それが見たい人は見れるようにしておく。それは多少普通の電子メールよりはフォーマルにならざるを得ないけれど、それでも大分違うと思うんです。

○蔵 本 そうかもしれないな。それはいいアイデアかもしれないな。

○池田研 ただ、そのうちのどれぐらいが雑誌に、全部投稿することに同意するかという…。

○読者D それはだから、その場合はもう雑誌に載せるという前提でやるしかないんじゃないですかね。というか、あれは無理なんですよ、編集するというのは。

一応みんなに前のときに聞いて、非常に困ったんですよ。というのは、一部切ると、それに対して、コメントの方で全部説明につながっているから、無理になっちゃうんです。

○読者A 大体やばいところがひっかかってくるという議論があるから。

○蔵 本 それはどうしてもいいかげんな形に、ある意味では非常にいいかげんな形になりますよね。個人個人のプライバシーとか、非常に神経質になっちゃうと何もできないですね、あ

れはね。

○池田研 別にそれは匿名発言でもいいわけね。

○読者D ええそうですね、匿名発言でもいい。

○池田研 そういう格好で、「物性研究」の論文を読んだとか、あるいは自分のやってる研究に関して、こういうことを知ってる者はいないかとかというのを、気軽に、Eメールのアドレスをみんなに開放しといて、アクセスできるようにしといたらいいかもしれないですね。

ただそこで、問題になることが1つあると思うんですけど、タイミングのということをさっき言われたんですけども、Eメールのタイミングと雑誌のタイミングというのが、これタイムスケールが大分違うんですよ。雑誌にはやっぱり雑誌のタイミングがあると思うんですよ。雑誌の持っている独特のタイミングがね。うまいこと雑誌のタイミングというか、タイムスケールが、うまいことEメールをやってるうちに合ってきてくれるようになるまで、大分時間がかかるんじゃないかという気はするんですけどね。Eメールに出して、それが雑誌に載って、それに対してEメールでレスポンスして、またそれをまたEメールという格好で投稿してと。

○読者A だから、雑誌に載せる前に、多分ファイルに入ってるから、それをだれかにやらせるみたいな感じでエミットしといて、それでレスポンスを待つという手はあると思うんですけど。ある程度……。

○蔵 本 Eメールやってるときは、ある意味ではのってるわけですね。雑誌に載せると冷めちゃうんですね。その差ですね。

○読者A そうですそうです、そうなんです。その差があると。

○池田研 逆に言うたら、冷めた方がええということもあるけれど。

○読者A まあまあ冷静に判断はできますけど。

○池田研 だから、雑誌のタイムスケールに合うとおもしろくなると思うんですよ。それを逆に使わないと。そうでなかったらEメールだけをやってる方がはるかによいわけで、Eメールボックスをつくっという、しかも雑誌とリンクさせるという意味はなくなってしまう。昔、僕も編集後記か何かで書いたことがありますけど、「ビックリハウス」とかいう雑誌があって、そこに次から次へとわけのわからん話を、おもしろそうな話を投稿しちゃう、それを読んだ読者が、それに自分の経験したような似たような話を連歌式にどんどんどんつなげていくという、そういう雑誌がありましたけどね。だけど、そういう何かタイミングの違いを考えるんだったら、やっぱりそれだったら、「物性研究」ではなくて、物性研究所属の別のボックスとして置くというふうに、せんといかんと思うんですね。

○蔵 本 読者参加的な部分ですね。そういうのを今後広げていくか、積極的に広げていくか、全体を読者の広場的なものにするか。

○池田研 それで、編集の方から言わせてもらいますと、やっぱり専従の人がいないんで、そういうことを処理するときに困るんですがねえ。

○蔵 本 片手間で作ってるわけですからね。

○池田研 何かうまいこと、そこを融合したような形ができるといいんですけどね、そういう格好にして。

それで、僕もこだわりますけども、Eメールなんかは、割合即時的にみな乗ってくると思うんですけども、もうちょっと長いタイムスケールでもって自分の表現したいことをまとめた格好で表現したいという気持ちをすくい上げる、それは割合、「物性研究」としてやりやすいやり方なんですけども。特別寄稿というのを企画したのも、将来的にはそれを呼び水にして、次から次へと投稿する人がどんどん出てきて、またそれに雑誌のタイムスケールを一応心得ながら他の人が絡んでくるというように持っていければ、「物性研究」のある面は僕は成功したと思うんですけども、なかなかそう持っていけない。その辺あたりはどうなんですかね。

☆

☆

☆

○蔵 本 もう余り時間がないから、ついでに言わせてもらえば、学術体制と研究体制とか、そういう少し社会的な広がりを持ったそういうものが、現在では乏しいんですけども、随分いろんな大変な状況なんですね、今。大学院の改組とか、あるいは科研費審査一つをとっても、随分おかしいと思うようなことを、皆さん日ごろから思っていらっしゃると思うんですけども、そういうはけ口、単なるはけ口じゃないかもしれないけど、いろんな批判はそれぞれ持っていらっしゃると思うんですよね。そういうものの受け皿が非常にないと思うんですね。で、「物性研究」というのは、そういうとこで何かやっていこうじゃないかということもあるんですけども。

○山 田 今は物を言いにくい時代ですよ。だけど、将来いずれ問題になるでしょうね。

○蔵 本 最後に、非常に僕らはそういうものに対して、物すごく無力感を長年持たされてしまってるというところがあるんですけども、でもやっぱり研究者のモラルまで破壊されるということ、もっと内容的にたちの悪い事態が進行している気がするんですね。

○池田研 これは僕も最後に言おうと思うんですけど、「物性研究」の社会的な役割と言えば

いいのか、そういう議論の場としても開放するべきやとは思うんですけども。

○読者C そういう意味では、「物性研だより」の方が、むしろ僕はおもしろいような気がするんです。多少広報的な性格を持っていますが、そういう記事はありますね。

○池田研 それに絡んでですけども、基研の研究部員会議の関係の記事を最近掲載してないんですが、やっぱりあれは掲載した方がいいという意見もありまして、ちょっと考えなおそうと思っているんですけども。基研の中でどういう動きをしとるかということの裏話ではないですけども、基研の場合はかなりそれが公にされますから。

○蔵 本 それは生の議論として出るんでしょ、会話の形でね。あれは非常に読みやすいというか、魅力がありますね。

○読者A 結構おもしろいですね。

○蔵 本 相当自分から離れた問題でも、会話的に書いてあると、何となく読んでしまう。

○池田研 そういう問題もあるんですけども、社会的な側面を重視して、それに関する記事をシステムティックな格好で載っけていこうと思ったら、やっぱりライターを確保せんといかんという問題があります。なかなかそこまで書いてくれるライターというのは、物理のコミュニティーの中で発見しようと思うと難しいですね。ほんまに、研究費の配分にしても、予算配分にしても、全くゼネコン化してまして。

○山 田 僕がこの間「物性研究」を見たんですけどね、僕が編集しているころよりは、かなりコメントとかいろいろ活発に討論があつてね、ちょっとずつ上向きになっているんじゃないかと思うんですけどね。方向はいい方向を向いているように思いますけどね。苦勞されているんでしょうけど。

○池田研 だけど、やっぱりこういう角度、5度ぐらいじゃやっぱりだめで、やっぱり立ち上がるときは指数関数的に立ち上がって、後は平穩になるという、指数関数的にも立ち上がるような時期がないとだめだと思うんですが。

○山 田 出だしはゆっくりでも、ノンリニアで行くんじゃないですか。(笑声)

○池田研 ノンリニアは大概抑えられますから。

○山 田 いやいや……。 (笑声) 最後は、指数関数的にいつて。

○勝 木 「物性研究」に直接関係がないかもしれませんが、社会的なあれということですね、実は例の決議3の問題、これを物理学会の中で見直し、考え直そうという話は委員会の中で相当出てきているんですよ。

○池田研 何ですか、決議3というのは。

○勝 木 決議3というのはあれです。

○読者A 僕が知ってることかもしれないんですが。

○勝 木 いや、例の物理学会の、あれです、物理学会は軍隊と……。

○池田研 ああ、あれですか。

○勝 木 あれです。いつも学会のプログラムの最初のページの真ん中に、四角で囲んであるでしょ。それから、いろんな共催とか国際会議とか何かのときに、いつもそこら辺がいろいろ実際にやっていこうとすると、ネックになるなあというようなことがあって、25年たって、昔の人がそんなことをやってんだけど、もう物理学会のメンバーも大分入れかわったんだし、それを考え直したらどうだという意見が述べられるようになってきているということなんです。

○池田研 それもありますし、皆さんがやっぱり一番関心あるのは、研究費の配分体制という問題もあるんだと思うんです。科研費の特に重点研究というのが物すごく重点視されているということがあって、そういうのはお金の流れ方から言うとゼネコンを通したお金の流し方と同じですね。親玉がおって、蛇口ひねれば子玉に落ちてくると。悪く言うと、あれは人脈を強化するという役割しか果たしてないんだと思うんだけど、結局ああいう形に予算配分のシステムが自己組織されちゃったんですよね。物性という学問の性格から言えば、僕の考えだと、大学内だけで閉じなくて、大学間を通してある程度小さいネットワークを組んで、ネットワークを組む人がいるときにはネットワークを組む、なくなりゃなくなってしまうというような、あちこちにアクティブなネットワークが随時できるという、そういうふうな研究費の配り方をせんといかんのですけど、今の予算配分法は、ほんまにまさにゼネコンでして、上から流して、下に及ぶ、上の蛇口を絞るか広げるかで一番末端まで行く金額が全部変わってくるというツリー状システムになっているように思います。そうすると、これは松田さんも言うとおられることで、僕も全く同感ですけども、アクセス権のある人となない人ができてしまう。人脈から外れる人はいつまでたってもおりてこない。そうすると、研究体制そのものがマイナーな部分というのをつくってしまうということが、どうしてもあるように思います。でもほんまに将来をリードする創造的部分というのは、マイナーな小っちゃいところからしか生まれてけえへんと思うんですけど、そういうものは全部壊してしまいかねないということが確かにあると思うんですよね。そういうことを考えたら、体制を批判してゆかねばならないということはもちろんあるでしょうけども、一方、そういうところから外れているような少数派をできるだけバックアップしていかないといかんと思う。だから、むしろそういう人たちが寄稿してきてくれるような格

好にしたい。そのためには何かある程度呼び水も“やらせ”も要るのかもしれないと思います。そういう意味じゃ、そういう人を紹介していただくというのは、非常にありがたいことだと思うんですけど。

○蔵 本 そういう恩恵に浴さない部分を救っていくということもあるんですけども、それよりそういう体制の上に乗かってやってる人も道義的にやっぱりいろいろ問題があると思うんで、いろいろ腐敗している面もあると思うんですね。そこを批判していく機能も必要じゃないかと思うんですけど。

○池田研 だけど、ライターがいますかね、問題は。いや、だから、そりゃ書けりゃそれはもちろんいいんですけどね。

○蔵 本 いや、みんな物取り主義になったらやっぱりしょうがないんで。

○池田研 それなんですよね。だから、いつもそこで困るのは、やっぱりそこで書く人がいないと、何でかといったら、書く人は全部利益享受者であるということになって、(笑声) それで書かないということがあるんですよ。

○読者C 科研費の在り方に対してもいろいろ意見があるんですが、「物性研究」という立場から見ると、確かにそういう意見をどんどん表明して討論していくというのは、活性化して読者層を広げる、非常にいい手段だと思いますね。ただ、批判するという立場は、あんまり初めから編集者が持って思い入れを強くして編集すると、やっぱりこれはかえってちょっと読者層を狭くする可能性はあると思います。

○池田研 あそこは、ああいう特殊なやつばかり集まっているという……。 (笑声)

○読者A 末端の方から見ると、わからないんですよ、そんなどういうふうになってるか。だから、逆に言うと批判はしょうがないというところもあるんですよ。

○池田研 一見余りにも破れ目なくつくられているようなシステムになってるんで……。

○蔵 本 ちゃんと必要な情報がわかってないということですね。

○読者A 入ってこない、そういうことですね。

○蔵 本 だから、そのために果たせる機能が「物性研究」にあるんじゃないかということですよ。

○読者A でも、ある程度情報にアクセスできるような人じゃないと、批判もできないわけです。

○池田研 それはそうです。

○読者A 多くの、多分不満、漠然とした不満を持っている人は、そういう情報にもアクセス

できてないから何も書けない状態にあるんだと思うんです。

○池田研 そうです。確かにそうです。だから、情報にさえアクセスできない。外から見て見えないわけですね。それは日本の官僚機構そのものですよ。

○読者A そうですね。

○蔵 本 情報をよこせという批判を書けばいい。

○読者A ああなるほど。

○池田研 匿名でいいから、3人ぐらいぐるになって書いて、特集してもいいですけど。いろいろあるでしょうけども、その中でできるものからしかやっていくことができないということがあるんですが。ところで、時間どうですか、まだあと20分ぐらい？

まだ、コンクルージョンを言うのはちょっと早いですか。

○蔵 本 コンクルージョンあるんですか。

○池田研 いや、コンクルージョンというよりも、せっかくの機会なんで、非常にせこいレベルで言えば、皆さんに原稿集めとか、あるいは人の紹介だとか、そういうのに、ぜひとも協力していただきたいということはもちろんあるわけなんですけども。特に別に結論めいたものを言うつもりは全くありません。

○読者C 「物性研究」の中で研究会の報告書というのはかなりのウェイトを占めてると思うんですよ、現在。あれは機能しているんでしょうかね。つまりもっとあけすけに言えば、読まれているんでしょうかね。

○池田研 あれは結構まじめに読まれてますよ。

○読者C そうですか。関係ない研究なら全然読まないんですけどね。

○池田研 ああそうですか。あれは結構読まれてますし、僕も読んでますけども。

○蔵 本 ただ、基研の研究会の性格というのが、かなりある意味で偏ってますから。

○山 田 僕も確かに地方にいたときにね、確かにどういう研究会があって、どういうことにみんな関心を持ってんのかというのを見るのにね、「物性研究」は非常に参考になりましたけどね。詳細に読むわけじゃないんだけど、プログラムだけでもね。

○池田研 「物性研究」の中で情報誌としての役割を果たしている一番中心的な部分というのは、研究会報告ですよ。それ以外はマスター論文だとかいろいろありますけども。研究会報告が掲載されたおかげで非常に売れてるボリュームがあったり、例えば読者がたくさんつくような研究会だったら、そのボリュームは完売してなくなってしまったりしますね。

○読者C 基研の研究会の報告結果をですか。

○池田研　そうです。

○蔵　本　研究会をやると「物性研究」に報告の義務があるわけです。

○読者B　今は研究会報告より、一番最後に編集後記ですね。昔は編集後記の後にあれがついてて、それは雑誌とは別の付録だという考え方がある時期まで。ところが、編集後記のつもりが巻頭言になっちゃうもんだから。（笑声）

○蔵　本　研究会報告もそうですか。科研費の報告は別でしたけど、黄色い表紙の……。

○山　田　それと基研の研究部員会報告とかね、ああいうのはみんな後ろに。

☆

☆

☆

○池田研　あと20分ほどありますから、最後の10分くらいですけども。何か「物性研究」というのはかくあるべしという、何か補足的なことがあったら、いや補足でなくても結構ですけど。

○池田隆　いつだったか編集委員会のときに、この座談会用にちょっとたしか言ったと思いますが、何となくコンデンスドマター関係というのは、割と「物性研究」というのと全く何か無縁というような意識が、いつからか知らないんですが、あるんですね。それをどうするかというのが課題の一つだと思うんですね。

○蔵　本　自己充足している分野を、特に引っ張り出そうというふうなことは、僕は余り考えない。今の自己充足で結構それで論理が進歩していれば、それはそれでいいんだと思うんですね。物性の中にも必ずしもそうでない面がたくさんあるし。

○池田隆　だから、ただたまにそういう何か超伝導とか磁性とかの実験の方で送ってこられる方の論文を載せたりしますよね。あれは載せるんだったら、やっぱりもうちょっとその方向に力を入れてもいいと思うんですけど。

○池田研　あれは個別的なんですけども、あの論文を寄稿された方は物性の方じゃなくて、物性の方でない方が超伝導の研究をやっているということで、ついては物性の人に読んでもらいたいということで特に「物性研究」に投稿されたということです。

○池田隆　それが目的でしたっけ。

○池田研　ええ、だからそれは目的がはっきりしているので掲載したんです。

○池田隆　ああそうなんですか。

○山　田　コンデンスドマター関係も、それはだからそういう方面の研究者の問題だと思うん

ですけどね。やっぱりもっと積極的に「物性研究」を利用しないといけないと思うんですけどね。

○蔵 本 しなければいけないというわけではないと思うんですけど、必要ないのなら。

○山 田 必要がないことはないと思うんですけどね。いろんな広い立場からコンデンスドマターを考えるとという意味で。

○池田研 はぐれ雲みたいな人が投稿してくれば、保守本流でない人でも投稿してくればいいわけです。

○山 田 60年代の長岡さんが編集されていたころには、近藤効果をめぐる激論が掲載されています。だから、本流でもいいと思うんですけどね。本流も問題があると思うんで。

○池田隆 だから、本流の人がたまに載せるということが何か前例としてないと、やっぱり見ないし、例えばよくありますよね。雑誌でこんなおもしろい論文がこんなところに出てたということがありますよね、今でも。そういう格好に「物性研究」を持っていければ意味があるわけですよ。で、例えば僕がマスターのころなんかでも、何の機会だったか、割と何か多体問題関係のレビューみたいなのをだれかが書いてて、どなたかは忘れました。何か一次元関係だったんですけど、要するにわかりやすいレビューを日本語だから書いてくれているという。

○池田研 田崎さんですか。

○池田隆 違います。いや、10年ぐらい前、10年近く前、そういうことがあったんですが。たしかそのレビュー、僕コピーしてまだ持っていると思うんですけど、それはやっぱり何かわかりやすいのを偉い人は書いてくれている——偉い人というか、専門家が書いてくれているというんで、非常にアンチョコ的な意味で。

○池田研 今それを求めるとしたら、特別寄稿という格好で依頼するか、それか講義ノートという格好で依頼するしか方法ないですね。

○池田隆 でも、多分そのどちらでもなかったと思うんです、それ。スタイルとして、特別寄稿であんなのを書いてくれるはずないし。

○池田研 特別寄稿を始めたのは、ごく最近から。

○池田隆 あっそうかそうか。講義ノートではないですね、あれは。

○蔵 本 昔、講義ノートに久保先生の統計力学という講義ノートがありましたでしょ。僕が大学院のときでした。大切にあって、随分役に立ちました。教科書みたいに使っていました。今も見てますが。

○池田研 あれは講義録になるんじゃないですか。

○蔵 木 講義録か講義ノートか知りませんけど。

○池田研 僕も持ってますけど、講義録でしょ、多分。講義録をだれかがもう一遍編集し直して載つけたんじゃないかな。だから、岩波の「統計物理」を買う必要がなかったという、そういうこともあるんですけどね。(笑声)

○蔵 本 それぐらい価値がある。

○池田研 そうですね、だからそういうことをやろうとしたら、やっぱり今のところ自然な投稿を待ってたんでは、多分だめなんじゃないですか。

それでさっきの話になりますけど、「物性研究」というのはこういう人が集まってるものであるという、色はかなりはっきりして、よくも悪しくもそういう色はかなりはっきりしているというところがあるから。

○読者A 僕の個人的な好みでいくと、最近物理学会誌で定年になる人が思い出話みたいなのを語ってますけども、もうちょっと突っ込んだ話を、例えば自分の研究の歴史みたいなものを振り返ってまとめてくださると。結構我々なんか現代のしか見てないから。僕は個人的に歴史みたいなのが好きだということもあるかもしれないけれども、結構おもしろいですよね、読み物としても。

○蔵 本 何年か前、富田先生のがありましたね。

○読者A ありましたね。で、ちょうどここに来る前に川崎先生が東北大で講演されて、非平衡統計力学の歩みとかいう話をして、自分がかかわったような話を、非常にまとまった話をされた。そういうのを「物性研究」とかでまとまった分量、学会誌だったら本当に話だけでお茶を濁しているようなところもあるんだけど、ある程度まとまった分量で自分の考え方とか物理のとらえ方が見えるように書いていただけると、多分かなり広範な読者の人も興味を持つと思うんですけど。そういうのを特別原稿として依頼してもらおうとおもしろいんじゃないですか。もうそろそろ蔵本先生とか、大分先か。

○蔵 本 一昔前はそういう使命感を持った人がいたんですね。偉大な人というのは使命感を持ってるわけですね。それだけ全体を見渡したわけなんです。今は偉い人でも不可能です。

○池田研 なかなか頼んでも、そういう方は忙しくて書いていただけないということがありますね。

○読者A それは問題だと思うんですけど。

○池田研 どっかでそういう講義をとった講義録という格好でだれかが筆記したものを載せるという格好になりがちなんですよ。書きおろしというのは、やっぱりなかなか難しい。書き

おろしというレベルになったら、やっぱりそれならそれなりにふんどし締めてもらわんといかんから。それでも一遍頼んでみるという手はあります。

だから、具体的にできそうなことをあげていただくと、非常にありがたいと思います。こんなものをやるのも、いいんじゃないかとか、あんなものをやってみていいんじゃないかということ積極的に「物性研究」の編集部に言っていただくというのは非常にありがたいです。

専従者がいないという今の状態のままで、この雑誌をよくしていこうというのはかなりしんどい。しかし一方で、単に消極的に原稿を集めてくるだけじゃなくて、いろんな人がどんどん書きたいという雑誌にしていこうという気持ちは非常に持っているんですけども、なかなか思うように転がらないし、そのためにはどうやればいいのかというのもなかなかわからないというのが現状です。だから、いろんなことをきょうおっしゃられたことも含めて、試みとして考えてみようかと思っています。

何か特に、まだちょっとありますでしょうか。

○読者C 日本語の問題なんですが、日本語を大切にするというのは、確かにそれは重要なことだと思いますが、非常に厳密にそれにこだわって、例えば特定の投稿に対して英訳を出したいという申し入れがあったときに断るというような、そこまで具体的にやってるのかどうか知りませんが、例えばやる必要はないように僕は思うんですね。その辺がやっぱり、つまり世界じゅうに広がらないということは、もっと発言が引用されにくいということが、投稿するに際してかなりディスカレッジングな要素になってるのは確かだと思うんで。

○池田研 例えば一つ特例を認めたとするでしょ。そしたら、英文で出せるんだったら出した人は結構いると思うんですね。そうすると、これはドミノ理論じゃないですけども、やっぱりそういう寄稿が物すごうふえていくんじゃないかということがありますよね。

○読者C 困るんですか。

○池田研 いや、そうなると、逆に英文で書かないと「物性研究」に投稿しないということにならんと限らんと思うんですけど。

○読者C そこまではいかないと思いますけどね。

○池田研 これはだから……。

○蔵 本 二流の英文誌になってしまってもしょうがないですね。

○読者A この間、日韓の共同の研究会みたいなのが英文で研究会報告を書いてましたよね。

○池田研 あれはやむを得ない事情ですね。韓国の方が入ってられたので、それを日本語に翻訳するということはちょっと難しいと思いますしね。そういう場合、特例として認めるという

方針ですね。日本人が寄稿していただく分には、できるだけ日本語で書いていただきたいと。

○山 田 昔はね、ジャーナルはねられたら、即、「物性研究」の方に入れちゃうんですよ。

(笑声) そういうのを防ぐためには、英文は困りますという。修士論文なんかは英文はそのまま載せてあると思いますけどね。

○池田研 だけど、どの辺に原則をつくるかというのは非常に難しいです。

○山 田 難しいですけどね、このごろそういうことはないかもしれませんが、ジャーナルをはねられると、ぱっと同じのが来るのがあるんですよ。ジャーナルのレフェリーで知ってて、それがああ来たかというのがわかるときがあるんですよ。(笑声) そういうときは、やっぱりちょっと何となくそういう雑誌に「物性研究」がなくなってしまったんじゃ、ちょっと困るしね。

○池田研 だから、やっぱり歯どめをどっかにつくらんとしようがないと思うんですけどね。外国人の寄稿者の場合は、それはしようがないと思うんですけどね。外国人の寄稿者の場合でも、例えば今ちょっと内密にやってますけども、外国人の例えば特別講義みたいなもんでも、一応日本語にやっぱり訳してもらおうと、それでまあ載っけようかと。これはオフレコですが。

○池田隆 オフレコのオフレコで、あれはちょっと日本語に多分できないと。

○池田研 できない。(笑声)

○池田隆 だって、でもそれはいいと思うんですけど。だって注釈つけば、それはやっぱり生の言語で。

○池田研 それはそれでいいと思います。

○蔵 本 向こうの人は向こうの人の感性で、やっぱり母国語で……。

○池田隆 ええ、だから、そういうふうに努力しているから、それをわざわざ裏切る必要はないので。

○池田研 そういう場合はしようがないと思います。

○池田隆 それで、さっきの、例えばマスター論文の類いをやっぱり英語にして皆さん最近投稿される人が多いわけですが、それは何か儀式みたいに、最近修士論文といたらもう英語で要するに何かなった気分で、今まで論文を書いたことないけどこれが最初だという感じでね。そういう気分で、多分みんな書きたがるんでしょ、恐らく。だけど、書きたがるだけで、言いたいことが何かはっきりしてないわけで、それを日本語で表現してもらった方が言いたいことがはっきりするから、日本語でどうぞというのがこっちの意図なのに、みんなは英語で書きたいから英語で投稿するということが結局になってしまってる。

○山 田 このごろはほとんど英語ですか、修士論文は。

○池田隆 ですね。

○山 田 昔は英語の方が珍しかったですね。

○池田隆 だって、最近になってみんなわざわざきれいに製本をしたり、する必要もないのに。

○勝 木 英語で書くように指導しているんですか。

○池田隆 いや、違うんじゃないですか。

○勝 木 本人が書きたがるんですか。

○蔵 本 自由に任せてますけれども。

○池田隆 書きたがるんだと思うんですけど。

○読者C 僕は強要してますけどね。英語でなかったら意味がない。言葉にこだわるというそのプリンシプルも大事ですが、僕は非常にプラグマティックなというか、機能的な考え方で、とにかく読まれないと意味がないから英語で書けと、英語で書いてどんどん自分で100部でもコピーつくって、世界じゅうに配れというふうにしてますね。

○山 田 投稿論文と別に。

○読者C そうです。そのままもちろん修士論文を投稿論文にするわけにはいきませんから、スタイルからいっていろいろごたごたありますから。

○勝 木 修士論文そのものをというつもりだったですけど、修士論文そのものを英語で書くように指導してるんですか。

○読者C そうです。

○池田隆 ファーストドラフトみたいなものはみんな日本語じゃないんですか。

○読者C 最初から全部英語で書いてます。いや、それは人によるんでしょうが。

○池田研 申しわけないんですが、ちょうど時間です。その後、議論のある人は下のロビーあたりで、あるいは喫茶店で議論していただくということで。これで一応速記者の方、2時間ということになってますので。話にまた熱が出てきたところで冷や水かけて申しわけないですけども、一応これでお開きということにしたいと思うんです。

どうもありがとうございました。

—— 午後8時35分 閉会 ——